

津田禾粒先生とともに

中山 輝 也*

2年ほど応用地質で過ごし、新潟県庁に転職するや、プロジェクトの地質を担当した。外部発注などはほとんどなく直営重視の時代である。とうてい私一人では遂行不可能であった。当然、県庁の他部所の先輩の百武松兎さん、須田光治さん、米沢富信さんらの応援を得る。踏査を行って土木地質図を作れば良いが、折角の機会でもあり、学術的にも資料として利用できるよう新潟大学の御協力も戴く。難波山を中心とした地区であり、構造、堆積環境等を含め権威者である西田彰一先生と、津田先生をお願いした。

津田先生からは在学中教養部での一般地質、専門課程での古生物学などの講義を受けていたが、本格的な出会いはこのときからと思う。多忙な両先生は講義、研究の合間をぬって踏査用のジープで行ける所まで行き、山をかけのぼり、あるいは溪流を下るという毎日であった。在学中では到底味わえない御指導を受けた。津田先生は当時30代半ば独特のセンスでルートマップを作ったり、仮設を立てたり大忙しであった。そんななかにも茶目っ気もあり、午前10時頃とお昼にはコップで湯を沸かし、インスタント紅茶を飲むことも大切な日課の一つである。何日も同じ浮浪者につきまわれ、インスタント紅茶を奪われ、お金と引き換えて取り戻したこともある。先生も私もくやしくてならない。西田先生だけは脇でニヤニヤしていた。踏査は数年にわたったが、御指導のお陰で立派にまとめることが出来、また津田先生にはお一人、また連名で数多くの「難波山」に関する論文を発表された。

その後は設立まもない新潟応用地質研究会に対しての御指導や地すべり、ダム地質などで独特のヒラメキの数々の御助言を戴き、当時技術に携わる私にとって大きな糧となった。

昭和48年、深く考えず商売を始める為の退職の相談のときはむしろ、技術屋として立派に生きる道を求めるべきであると云われ、商売には賛成されなかったが、すでに退職届けを受理されている既成事実などから仕方がないと云った印象であった。津田先生は、本心は商売には「しぶしぶ」という感じであったが、それでも励まされ、その後心配なのか電話を頂いたり、来社されたりした。

昭和50年の春、ナイジェリアからお帰りになられた先生から早速電話を戴いた。会社の状況を聞いてやっと安心されたようである。その後、ナイジェリアから来日したフワヨセ博士をつれての難波山巡検には津田先生も旧知の上越在住の牛木五治郎さんとともに参加し、未整備の林道で名立川をさかのぼり、矢代川を下ったのも楽しい思い出である。飲むほどに陽気になる酒好きのフワヨセ博士の度を過ごすのを冗談まじりで抑えるのは津田先生の役割であった。

その後、社業も発展し、昭和53年、本社屋を移転して、ようやく世間並みになったことをまるで御自分のことのように喜んで下さった。忙しい合間をみて、技術社員への講演を引き受けたり、とくにマングローブ、地球環境などのテーマは社員の心を引きつけた。その後、各種団体の会合の際、一般の人々への地質学の為、ボランティアをお願いしたことも多い。地球環境のお話は、マスコミでとり

* (株)キタック

あげる前からの先生の持論であった。

先生が学長就任の前後と思うが、私が「地質」で社会的貢献が出来るものはないかと模索している中で、公益法人としての研究機関の設置を思いつき、御意見を伺ったときは「慎重派」の津田先生も会社を作るときの忠告はされず、むしろ実践面での難しさなどをいろいろお話を下さった。その後、この法人が認可され、地道ながら業績を上げつつある。地盤情報蒐集、県内特殊地盤の研究、ハザードマップなどを取り上げ、さらにはグローバル化、国際化時代における地質学の立場など、沢山のテーマがある。これらの問題について津田先生の御意見をしばしば拝聴した。ミニ財団も一歩一歩着実に歩んでいるのも津田先生のお力添えによるものと思う。

最近では環日本海時代、私も微力ながら技術協力について参加しているが、その種の会合で先生にお願いしている「地球環境」のお話で、中国など近隣諸外国の技術者、国内各地の技術者がどれ位感銘をうけたことであろう。退職後も行政機関などで様々な委員会に携わり、お忙しい毎日を送っていたが、時折、ノーネクタイでブラリと私の会社へ。紅茶にアルメニア・コニャックを入れてお勧めすると「ストレートの方が良い」とおっしゃって空になった茶碗につき、香りを味わいながら熱心に未熟な私を御指導下さった。また、時折、お好きなつりのご自慢もされていた。

環日本海時代といわれる中で、実績が評価され、新潟県対外科学技術交流協会が環日本海新潟賞を頂いた。これも先生の熱心な推薦のお陰で受賞が決定したものである。「受賞式には是非出席したい」とおっしゃって下さいましたのに。受賞の決定を喜んで下さった先生の明るいお声がや笑顔が忘れられない。

数年前、数日の休みを利用して、おとぎ話のような回教国ブルネイを訪問する機会を得、先生にそのお話をした。首刈り族が今なお住むマングローブ・スワンプ探訪をお誘いしたところ、うらやましように「面白そうだね。僕は暇があるよ。」と喜んでいて。ブルネイの前にインドネシア領のバタム島にお供した。缶ビール片手にとても楽しい旅であった。

それから1年もたたないうちにご病気というお知らせ。平成7年11月1日の我が社の竣工式には体調が完全でない中、神事からご出席下さった。

私が先生に最後にお目にかかりましたのは12月26日である。香港ペニンシュラホテルのハウスチョコレートを買って帰り、先生に召し上がっていただきたいと思い、病院へ持参した。丁度お好きなコーヒーを召し上がりながら奥様に「日本のチョコレートはまずいね」と話されているところへ参上したので、本当に良かったと思う。少し前、ある印刷物に私は「これから寒くなるので、今は無理でしょうが、暖くなるまでに体力をつけて、南洋の潮を引いたマングローブ林でバドワザーの缶を開けて、先生と共に大声で乾杯したい」と書いたばかりであったのに。

激動の昭和と共に生き「人を大切に」「思いやり」をキーワードに、大学を身近なものとして地域を結び、また人類存亡の危機に面した地球環境を憂慮し、常に明日の日本、そして世界のことを考え抜いてこられた津田先生を失うことに惜別の情、堪え難いものがある。